

大学生のエイジズムとその関連要因

Correlates of ageism among Japanese university students

1K06A0461

指導教員 主査 岡浩一朗先生

大口 光

副査 中村好男先生

．はじめに

現在日本の高齢化率は 20%を大きく超えており、本格的な高齢化社会に突入している。これから人口が減少していくことが予想されているが、高齢化率は変わらず上昇を続け、将来は 3 人に 1 人が高齢者となるであろう。社会保障などの問題を考えれば、少ない若者で多くの高齢者を支えなければならない。そのような社会において「高齢者には生産性がない」などと決して誰も考えないために、高齢者と他世代との相互理解は不可欠である。高齢者に対する様々な形態の偏見・差別をエイジズムと呼ぶが、レイシズム（人種差別）セクシズム（性差別）に続く第 3 のイズムとして注目されている。エイジズムに関連する要因については、これまでも研究がなされてきているが、まだまだ十分とは言えない。本研究では大学生に対してアンケート調査を実施し、大学生のエイジズムとその関連要因について検証する。

．調査方法

2009 年度早稲田大学スポーツ科学部の講義「健康スポーツ原論 B」を受講している学生 45 名に対してアンケート調査を実施した。対象者の学年は 2～4 年生で、男性が 25(55.6%)名、女性が 20(44.4%)名、平均年齢は 20.78 歳であった。祖父母やその他の高齢者との接触経験、高齢者の臨終を看取った経験と、加齢に関する知識(FAQ Part1:The Facts on Aging Quiz)、エイジズム尺度(FSA:Fraboni Scale of Ageism)との間で t 検定を行った。また老後感、死への

不安については FAQ、FSA との間で相関係数を算出した。

．結果

FSA「差別」因子項目の点数において、男性の方が女性よりも有意に高い点を記録していた。

祖父母との同居経験の有無による、エイジズムの点数には有意な差は見られなかった。

FSA 合計点、FSA「誹謗」項目の点数、FSA「回避」項目の点数において、祖父母と遊んだ思い出のある人の方が無い人よりも有意に高い点を記録していた。

自宅近所における高齢者との接触経験の有無による、エイジズムの点数には有意な差は見られなかった。

高齢者の臨終を看取った経験の有無による、エイジズムの点数には有意な差は見られなかった。

老後感、死への不安の程度と FAQ、FSA の点数の間には有意な相関は見られなかった。

．考察

男性の方が女性よりも高齢者に対して差別的な感情を抱く可能性がある事が示唆された。性別によってエイジズムに違いが出ることを受けて、特にセクシズム（性差別）との関連性の検証が重要であることが分かった。祖父母との同居経験の有無、自宅近所における高齢者との接触経験の有無については有意な結果を見ることは出来なかったが、祖父母と一緒に遊んだ思い出の有無については有意な結果が得られた。

したがって単なる同居など高齢者との接触経験ではなく、その接触の質がエイジズムに影響を与える可能性があるという仮説が立てられる。対象者の老後感、死への不安とエイジズム点数での相関分析については、本研究では有意な相関は見られなかったが、他の先行研究では有意に関係している可能性が指摘されている。また本研究においては特定の学部 of 学生のみ to 調査を実施したが、小中高生、若年者、中年者など全ての世代に対して調査が必要であり、さらには高齢者自身のエイジズムを検証する調査も進めていくべきである。